

大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討 (2)

：みそ汁作り・お弁当交流会についてのインタビュー調査の結果から

滝口圭子・綿引伴子・尾島恭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江

An Inquiry on a Collaborative Study of University and Attached Schools (2): Miso-Soup-Making and Lunch-Time Interactions

Keiko TAKIGUCHI・Tomoko WATAHIKI・Kyoko OJIMA・Yosuke MATSUDA・
Masae HASHIMOTO・Izumi NAKATA・Yukie NISHITA

本研究の目的は、みそ汁作りを中心とする幼小中連携活動に参加した小学生と中学生を対象にインタビュー調査を実施し、小学生と中学生に認められた学びの内容を明らかにすることであった。収集された回答を分析した結果、小学生については、幼児や中学生に対する認識の変容と、班内において年長者であるとともに年少者でもあるという二面性に応じた振る舞いが確認された。一方で、中学生についても同様に、幼児や小学生に対する認識の変容が認められ、特に幼児に関しては、それまでの交流の経験に基づいて立てられた仮説を検証するというサイクルが認められた。小学生及び中学生に認められたそれぞれの役割の自覚と柔軟な対応について考察した。

問題と目的

2005（平成17）年の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」において、「遊びを通して学ぶ幼児期の教育活動から教科学習が中心の小学校以降の教育活動への円滑な移行を目指し、幼稚園等施設と小学校との連携を強化する」ことが示され、保育所・幼稚園等から小学校への移行に際しては、意識的な支援が必要であるという共通認識がもたらされた。一方で、2012（平成24）年の中央教育審議会初等中等教育分科会（第80回）では、「小中連携、一貫教育に取り組む学校、市町村においては、小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へ移行する段階で、不登校等の生徒指導上の諸問題につながっていく事態等（いわゆる中1ギャップ）に直面し、小学校から中学校への接続を円滑化する必要性を認識し、小中連携、一貫教育に取り組み始めたケースが見られる」ことが提起され、小学校から中学校への移行支援に関しても、地域によっては自覚的な取り組みが始められていることが確認された。保育

所・幼稚園から小学校への就学や、小学校から中学校への進学は、子どもにとっても保護者にとっても比較的深刻な環境移行であると考えられ、その段差を解消するための取り組みが模索される一方で、段差を乗り越えることによる成長（日本発達心理学会、2013）に着目し、段差を乗り越えるのに必要な子どもの力（福島大学附属幼稚園・大宮・白石・原野、2011）の解明を巡る議論も蓄積されつつある。

以上のように、保育所・幼稚園、小学校、中学校が、子どもの育ちを支えるという共通の使命を中核に据えつつ、物理的にも心理的にも歩み寄ろうとする気運がこれまでになく高まる中、異校種間の交流や連携も様々に報告されるようになってきた。しかし、研究の多くは、幼稚園と小学校もしくは小学校と中学校という連続する2校種間での取り組みとなっており（例えば、お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター、2008）、また、教科内容の系統的指導を実現するための一貫したカリキュラム構築に関する報告がほとんどである（例えば、遠藤、2013）。つまり、幼稚園、小

学校、中学校という3校種の幼児、児童、生徒が同じ活動に取り組むような連携事例の開発はほとんどなされておらず、加えて、連携事例における子どもの学習内容を明らかにしようとする研究も見当たらないという現状がある。

さて、金沢大学人間社会学域学校教育学類・附属学校園研究推進委員会に属する技術・家庭小委員会（委員長：綿引伴子）では、2012（平成24）年度より、幼稚園、小学校、中学校、高等学校という4校種での連携の在り方を積極的に模索し、実践の開発と成果の検証に取り組んでいる。技術・家庭小委員会の成員は、附属幼稚園教諭、技術及び家庭科担当者を中心とした附属小学校・中学校・高等学校教諭、そして家庭科教育専修もしくは教育基礎専修に所属する金沢大学学校教育学類教員であり、附属学校園の教員の負担にも配慮し、各成員が意欲的に取り組める実践事例を提案してきた（尾島・綿引・松田・滝口・橋本・西多・中村・中田，2013）。

本研究の目的は、技術・家庭小委員会が開発、運営を担当したみそ汁作りを中心とする幼小中連携活動（尾島・綿引・滝口・松田・橋本・中田・西多，印刷中）に参加した小学生と中学生を対象に実施されたインタビュー調査結果を分析することを通して、小学生と中学生のそれぞれに認められた学習内容の一部を明らかにすることである。

方 法

調査対象者：みそ汁作りを中心とした幼小中交流会の参加者は、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園年長2クラス52名、附属小学校3年生1クラス33名、附属中学校3年生1クラス38名であった。本研究の調査対象者は、交流会の実施に向けて設置された代表者会議の成員に加え、各クラス担任により選出された児童生徒であり、附属小学校3年生8名（男子児童4名、女子児童4名）及び附属中学校3年生8名（男子生徒5名、女子生徒3名）であった。小学生に関しては、代表者会議の成員ではあつ

たが、幼小中交流会を欠席した男子児童1名が含まれていたため分析には使用せず、男子児童3名、女子児童4名計7名の小学生から収集されたデータに基づいて分析を行った。

調査期間：幼小中交流会の開催日は平成24

（2012）年12月11日であり、本調査は交流会翌日から3日間に渡り12月12日、13日、14日に実施された。

手続き：面接者と調査対象児童及び生徒とが対座してインタビュー調査を実施した。小学生に対しては、主に「交流会全体の感想」、「幼児との具体的なやり取り」、「中学生との具体的なやり取り」、「幼児に対する印象の変化」、「中学生に対する印象の変化」を尋ね、中学生に対しては、主に「交流会全体の感想」、「幼児の様子や印象」、「小学生の様子や印象」について尋ねた。インタビュー内容はICレコーダーで記録された。音声記録内容を文字化したものを分析対象とした。解析には、テキストマイニングソフト「トレンドサーチ2008」を用いた。

結果と考察

（1）テキストマイニングによるレポート分析

小学生から収集したデータを「①活動全体について」「②幼児について」「③中学生について」に大別し、同様に中学生から収集したデータについても「①活動全体について」「②幼児について」「③小学生について」に大別した後に、形態素解析を行った。各カテゴリについて、出現頻度及びばらつきに基づき、「名詞」と「動詞・形容詞」に分類される重要キーワードを抽出した。重要キーワードとして抽出された語のうち、単独では意味をなしにくい語は除外した。具体的には、名詞では「子」「他」「中」「人」「前」等が、「動詞・形容詞」では「する」「なる」「ある」「ない」等が除外された。加えて、本研究において使用したテキストマイニングソフトの品詞分解においては、「形容動詞」が設定されておらず、例えば「勝手」「上手」「好き」「大丈夫」「適当」等のキーワードは「名詞」に分類され

たが、そのまま「名詞」として分析を進めた。そうした処理を経て選定された上位 15 語の重要キーワードを表 1（小学生：名詞）、表 2（小学生：動詞・形容詞）、表 3（中学生：名詞）及び表 4（中学生：動詞・形容詞）に示す。

次に、重要キーワードについて、関連性の強いキーワード同士が近くに配置されるようマッピングした（図 1～図 6）。マッピングに際しては、表 1 から表 4 に示す上位 15 語に加え、16 位以下に登場した語も含めた。関連性の強さは、

同じテキスト中の同時出現頻度の多さから算出されており、キーワード間の距離が近いほど、またキーワード間のリンクが太いほど関連性が強いと判断される。

(2) 小学生のインタビュー内容の特徴

<① 活動全体について>

小学生が活動全体について述べた内容に基づくキーワードマッピング（図 1）では、「友達」「ツリー」「楽しい」というキーワードにリンク

表 1 小学生の回答についての形態素重要度表（名詞）

重要度	活動全体について	幼児について	中学生について
1	友達	友達	みそ汁
2	豆腐	自分	弁当
3	ツリー	幼稚園児	お話
4	みそ汁	話	料理
5	旗	幼稚園	中学生
6	幼稚園生	上手	勉強
7	手	心配	お兄さん
8	幼稚園児	豆腐	自分
9	勝手	幼児	白菜
10	誘導	チーム	名前
11	鍋	意外	お姉さん
12	みそ	思い	ペア
13	シイタケ	得意	形
14	適当	アニメ	色
15	シール	好き嫌い	同じ

表 2 小学生の回答についての形態素重要度表（動詞・形容詞）

重要度	活動全体について	幼児について	中学生について
1	楽しい	遊ぶ	話す
2	うるさい	話しかける	教える
3	取る	思う	思う
4	貼る	ちぎる	優しい
5	作る	話し合う	しゃべる
6	入れる	言う	できる
7	教える	来る	食べる
8	行く	楽しい	似る
9	できる	話す	怒る
10	ちぎる	できる	考える
11	持つ	教える	面白い
12	食べる	接する	切る
13	思う	優しい	感じる
14	言う	弱い	呼ぶ
15	響い合う	知る	難しい

表 3 中学生の回答についての形態素重要度表（名詞）

重要度	活動全体について	幼児について	小学生について
1	興味	年下	会話
2	幼稚園	話	お世話
3	みそ汁	幼児	バックアップ
4	幼児	自分	自分
5	班	幼稚園児	中学生
6	話	みそ汁	食事
7	上手	中心	小学生
8	全体	好き	話
9	幼稚園児	スピード	印象
10	中学生	会話	園児
11	単純	テンション	わがまま
12	面白い	小学生	低学年
13	話し合い	クリスマス	形
14	意見	コミュニケーション	元氣
15	料理	活発	好き嫌い

表 4 中学生の回答についての形態素重要度表（動詞・形容詞）

重要度	活動全体について	幼児について	小学生について
1	作る	盛り上がる	関する
2	食べる	食べる	飲む
3	しゃべる	慣れる	思う
4	違う	小さい	食べる
5	話す	聞く	しゃべる
6	示す	ひっぱる	座る
7	思う	思う	徹する
8	感じる	感じる	盛り上がる
9	遊ぶ	関わる	見る
10	まとまる	残す	わかる
11	関わる	歩く	変わる
12	入る	言う	ひっぱる
13	深まる	うまい	助かる
14	動く	乗る	盛り上げる
15	使う	振る	難しい

するワードが多かった。「友達」の周囲に位置する語は、「手」「声」等の名詞、「嬉しい」「難しい」等の形容詞であった。同様に「ツリー」に関しては、「材料」「シール」等の名詞、「貼る」「飾る」等の動詞が配置され、「楽しい」に関しては、「みそ汁」「シイタケ」といった名詞、「作る」「ちぎる」等の動詞が配置されていた。

インタビュー内容を確認すると、「友達」に関しては、「そんなに友達にはなれなかったけど、何かみそ汁とか作ったりして、ちょっとは友達になれたかな。嬉しい気持ち。幼稚園の人。(中略)幼稚園とちょっと友達になるところが難しかった。そんなに声かけられなかったから、そんなに友達になれない」等の回答が認められた。同様に「ツリー」については、「楽しかったです。おみそ汁をつくったりするところとか、ツリーを飾ったところ、ツリーをシールで貼ったところが、何か適当に貼ってたら、緊張が最初からほぐれてるみたいなことになってたので」といった回答が、「楽しい」については、「みそ汁を作ったことが一番楽しかったです。みんなで作ったから、楽しかった。シイタケをちぎって、みそを入れた」「だいたい幼稚園児に教えていたから、まあ、一応楽しかった。やっぱりおみそ汁をみんなで作ったりするときに楽しかった」と

いった回答が確認された。

まず、本研究の対象とした小学生の多くは、幼小中交流会を楽しんでいたということが指摘される。友達や幼児、中学生と一緒にみそ汁を作るという行為を心から楽しんでいただ。尾島ら(印刷中)は、小学生にとってみそ汁作りは、活動後には「楽しかった」といえるイベントであり、また、弁当と一緒に食べたことよりもみそ汁作りの方が「とても楽しかった」と答えた割合が多かったことを明らかにしており、そうした報告を裏づける結果といえるであろう。

次に、小学生は、自分たちが活動を楽しむだけでなく、その場に自分たちよりも年少の幼児がいることを自覚し、幼児も楽しく参加できることや自分たちも幼児とともに楽しむことを、ある程度意識しながら活動に取り組んでいた可能性が指摘される。例えば、アイスプレイクとして用意されたクリスマスツリー作りを通して互いの緊張がほぐれたことや、幼児と友達になろうと試行錯誤しながら話しかけたことへの言及から、そうした意識を読み取ることができる。本活動において小学生は、幼児に対しては年長者である一方で、中学生にとっては年少者であるという二面性を抱えており、自身の立ち位置に戸惑う場面(尾島ら,印刷中)も多かったと

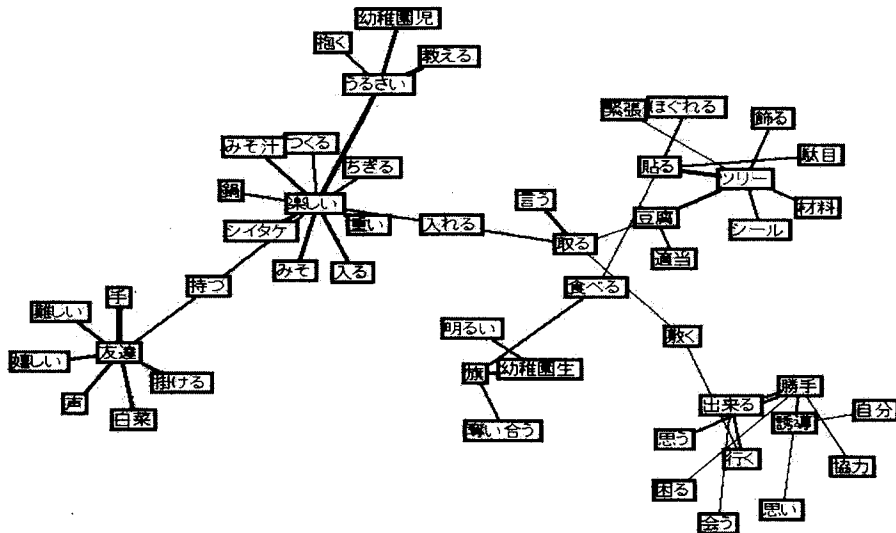


図1 小学生(①活動全体について)のキーワードマッピング

推測されるが、本研究の対象とした小学生は、そうした迷いの中にありながらも、幼児の世話をするという年長者の立場を担うことにおいて、より積極的であったといえそうだ。

<② 幼児について>

小学生が幼児について述べた内容に基づくキーワードマッピング(図2)では、「幼稚園児」「話」というキーワードにリンクするワードが多かった。「幼稚園児」の周囲に位置する語は、「得意」「意外」等の名詞、「教える」「接する」等の動詞であった。同様に「幼稚園」に関しては、「話しかける」「話し合う」等の動詞が配置されていた。

インタビュー内容を確認すると、「幼稚園児」に関しては、「まだ幼稚園児だから、ちょっといろんな自分の思いで動いてしまうこともあるだろうけど、そういうときは優しく教える」「やっぱり幼稚園児の子は、何か意外に人とうこうやって話したりするのが、私たちのチームの幼稚園児の子は、意外に接するのが得意みたいな感じで」といった回答が確認された。同様に「幼稚園」については、「幼稚園は自分から話しかけるところまでできた。幼稚園は楽しいとか。“うん”って言った。友達になれるかなとか思ってた」「何か豆腐ちぎるって言って、粉々とかに

ならないかなって心配してました。幼稚園の子は思ったより上手でした。いろいろ。話をするのはか。友達みたく、仲良く何か話し合ってました」といった回答が見受けられた。

小学生は、幼児に対しては年長者であるということをおる程度自覚し、例えば自分から話しかけるなど、幼児が楽しく参加できるよう配慮しながらその場に参加していたようだ。その一方で、活動前の予想に比して、幼児はより多くのことがより上手にできることを知り、幼児に対する認識を新たにしている様子がうかがえ、大変興味深い。小学生は、自身に期待された幼児に対する役割をおる程度忠実に果たしながらも、予想とは異なる幼児の姿に接し、その都度、幼児に対する言動を修正しながら関わっていたものと推測される。

<③ 中学生について>

小学生が中学生について述べた内容に基づくキーワードマッピング(図3)では、「優しい」「似る」「弁当」というキーワードにリンクするワードが多かった。「優しい」の周囲に位置する語は、「お兄さん」「中学生」等の名詞、「感じる」「話しかける」等の動詞であった。同様に「似る」に関しては、「関わる」「頑張る」等の動詞が配置され、「弁当」については、「色」「形」「ペ

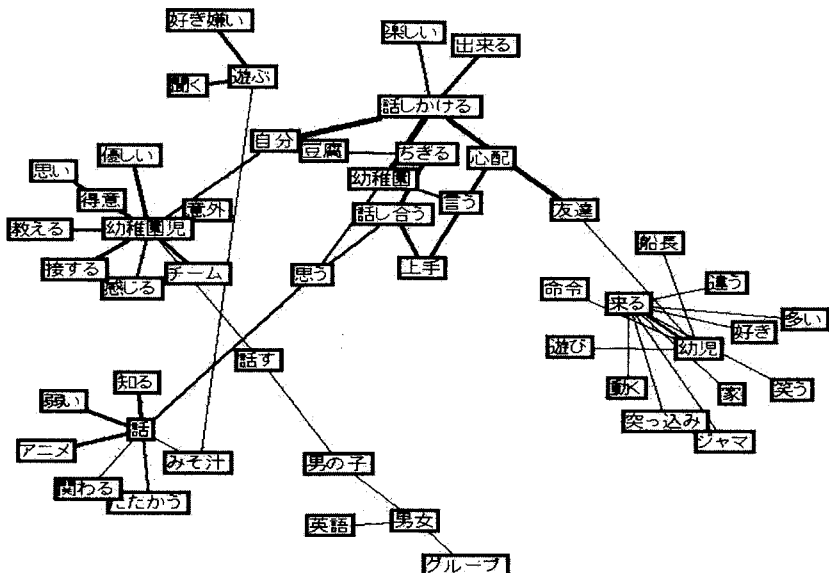


図2 小学生(②幼児について)のキーワードマッピング

ア」等の名詞が配置されていた。

インタビュー内容を確認すると、「優しい」に関しては、「中学生のお兄さんたちは、何か優しい感じだった。おみそ汁おいしいとか、白菜切るとか。中学生のお勉強、面白いとか。ちょっと難しいけど、楽しいって。ちょっと怖そうだなとか思ってたけど、優しかった」といった回答が確認された。同様に「似る」については、「勉強頑張ってるかなど。結構、附属小学校と似てるかな。やっぱり元気とか、明るいとか、そういうところがかなり似てました」といった回答が、「弁当」については、「ペアになった人とはお弁当が同じだったんで。お弁当箱。もう一人のお姉さんの方も、ちょっと色の違うピンク色の細長いタイプで、形も同じやつやったから、面白かった」といった回答が見受けられた。

本活動の事前調査（尾島ら，印刷中）では，中学生に対して自分から話しかけ，言うことを聞き，言葉遣いに気をつけることを自分に課し，年長者に対する気遣いを発揮しようとする小学生の姿が明らかにされている。本研究においては，例えば，自分の弁当箱が中学生のそれと同じであることや，公的な場での全体的な印象において中学生が自分たちと類似していることなど，自分たちと中学生との共通点を見出しなが

ら，中学生を理解し，そして中学生との関係の構築を図ろうとする小学生の姿勢が認められる。本活動の事後調査において，小学生は，中学生との関係について肯定的な言葉を多く記述していた（尾島ら，印刷中）ことから，中学生との良好な関係構築を目指して多様に試みたことは，小学生にとって決して不快な経験であったわけではなく，両者にとって意味のある触れ合いの場となっていたものと推測される。

(3) 中学生のインタビュー内容の特徴

<① 活動全体について>

中学生が活動全体について述べた内容に基づくキーワードマッピング（図4）では、「幼稚園」「食べる」「作る」というキーワードにリンクするワードが多かった。「幼稚園」の周囲に位置する語は、「大丈夫」「体」等の名詞、「遊ぶ」「話す」等の動詞であった。同様に「食べる」に関しては、「運営」「全体」等の名詞、「違う」「まとまる」等の動詞が配置され、「作る」については、「興味」「交流」等の名詞が配置されていた。

インタビュー内容を確認すると、「幼稚園」に関しては、「6月に中学生と幼稚園が交流した時には総合同会をやって，それで結構うまくいったので大丈夫かなど思っていた。今回もうまく

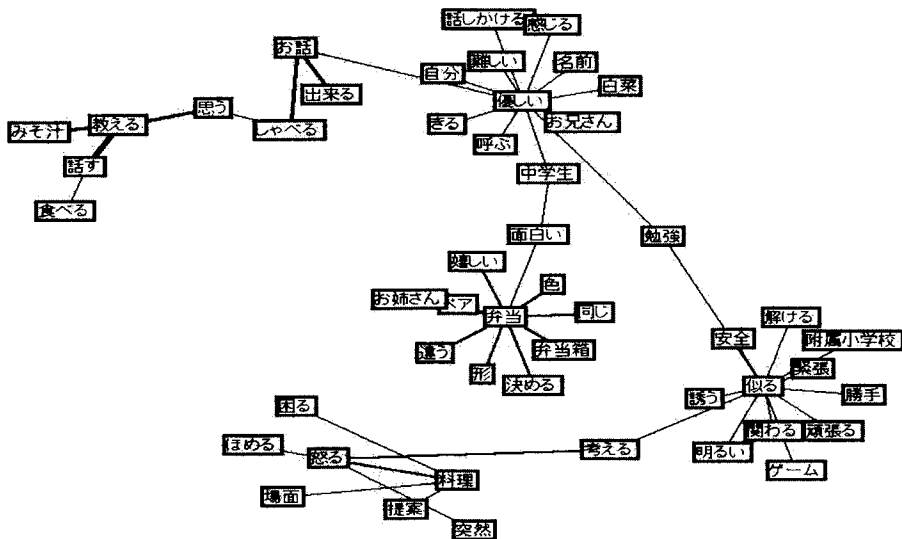


図3 小学生（③中学生について）のキーワードマッピング

いった。(中略)小学生と幼稚園も仲いい子が何人かいたんで、全体でごちゃごちゃと話していた。2人の女の子も幼稚園と話していた。(中略) 体で遊ぶみたいな感じだったら、昔から遊んでいる男の子とかは得意かなって思うんですけど、料理とかは、一緒にごはん食べようということになると女子も一緒にできるんだと思います。「もっと体を動かす遊びがあってもよかったかな。全員で関われるものがよかった」といった回答が確認された。同様に「食べる」に関しては、「全体の中では食べているときがよかった。『幼児を招こう』の時も自分たちの班は全体運営だったので、その時のことが参考になった。料理を作ってみみんなで食べるのは方向性的にもひとつのまとまりとしてよかった」といった回答が、「作る」については、「乗り気ではなかったが、やったらよかった。以前、『幼児を招こう』の焼きおにぎりで失敗した経験があったので、今回も乗り気ではなかった。以前は“作って出す”だったが、今回は“一緒に作る”だったので、それで交流が深まるてよかった。また、作業も簡単で、食べるのも一緒にだったのでよかった」といった回答が確認された。

本活動に参加した中学生は、中学校家庭科の学習内容に含まれる幼児との触れ合いの一環と

して、同年7月に実施された活動『幼児を招こう』(尾島ら, 2013; 橋本・綿引, 2013)を経験していた。その際に、幼児とのやり取りが成立し、ある程度の達成感を得られたグループもあれば、幼児の興味関心に合致した活動を提供できず、幼児の積極的な参加を促すことができなかったグループもあり、本活動に当たっての両者の意気込みの違いが認められる。しかし本活動では、多くの班において、幼児、小学生、中学生という3者間での活発な交流がなされており、本活動の事後調査における自由記述において、中学生の6割が、楽しかった、うれしかった、感動した、よかった等の肯定的な記述をしていた(尾島ら, 印刷中)ことから、本活動がある程度水準を満たした内容であったことを、中学生自身も認識していたと考えてよさそうである。本活動がある程度水準を満たすことができた要因の1つとして、数名の中学生が、『幼児を招こう』とは異なり“一緒に作って一緒に食べる”活動が含まれていたことを指摘しており、活動の成果と課題を客観的に分析する中学生の態度が指摘される。当然のことながら、中学生は、幼児の積極的な参加を促すことのみ心を砕いていたわけではなく、小学生にも配慮していたが、小学生と比べると、興味関心を

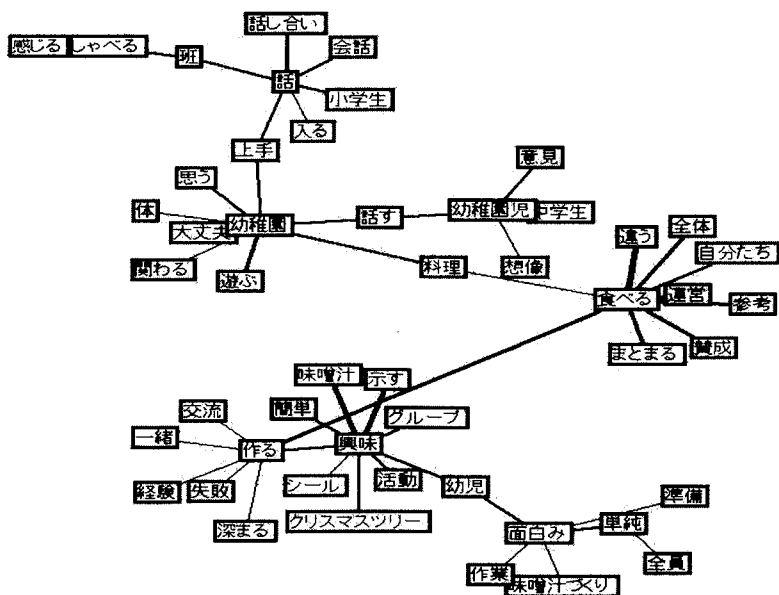


図4 中学生(①活動全体について)のキーワードマッピング

より把握しにくく、また言葉でのやり取りがより成立しにくい幼児との関わり方において、認識と自覚をより迫られる状況にあったことは確かであろう。

<② 幼児について>

中学生が幼児について述べた内容に基づくキーワードマッピング(図5)では、「幼児」「みそ汁」というキーワードにリンクするワードが多かった。「幼児」の周囲に位置する語は、「自分」「協調性」等の名詞、「しゃべる」「答える」等の動詞であった。同様に「みそ汁」に関しては、「小学生」「幼稚園児」等の名詞、「食べる」「行く」等の動詞が配置されていた。

インタビュー内容を確認すると、「幼児」に関しては、「自分のグループは幼児がしゃべってきたのでよかった。無口な幼児だったらどうなっていたかはわからない。今回は向こうがいろいろ聞いてきてくれて、こちらがそれに答える形。自分は小さい子が好きなんで。お兄ちゃんいるの?きょうだいいるの?おみそ汁おいしい?好き嫌いある?しいたげが嫌い?など。幼児はまとめるのが難しいなと最初は思っていたが、静かにしてなど言うことは聞いていたので、意外に協調性はあるなど」といった回答が確認された。同様に「みそ汁」については、「幼稚園児が

すごいテンション高くて、それがあったから、小学生もテンション高くなったのかもしれない。幼稚園4人ともテンション高くて。1人、おみそ汁の話になったら、めっちゃテンション下がる子がいて。(中略)みそ汁が食べれん子がおって、その子が食べれるようになって、中学生2人がまずおかわりして、ああおいしいおいしいってアピールしとったら、小学生が2人ともおかわりして、おいしいおいしいって見せて、そうしたら、幼稚園児が、みそ汁食べられない子の友達がおかわりするって言って、食べとったりして、おいしいおいしい、おいしいねとかやとったら、その子もちょっと食べてくれて、いえーいって。食べてくれました」といった回答が確認された。

まず、中学生が幼児に対する認識を改めたことに関する記述に着目したい。本活動に至るまでに、幼児との活動を蓄積してきた中学生は、幼児についてのいくらかの知識や態度を身につけていたと推測されるが、それは一面的なものであったかもしれない。しかしそれは、否定されるべき状態ではなく、本活動のように“一緒に作って一緒に食べる”といった協同作業に取り組む中で、幼児が持つ新たな一面に気づき、幼児に対するそれまでの認識に固執しすぎるこ

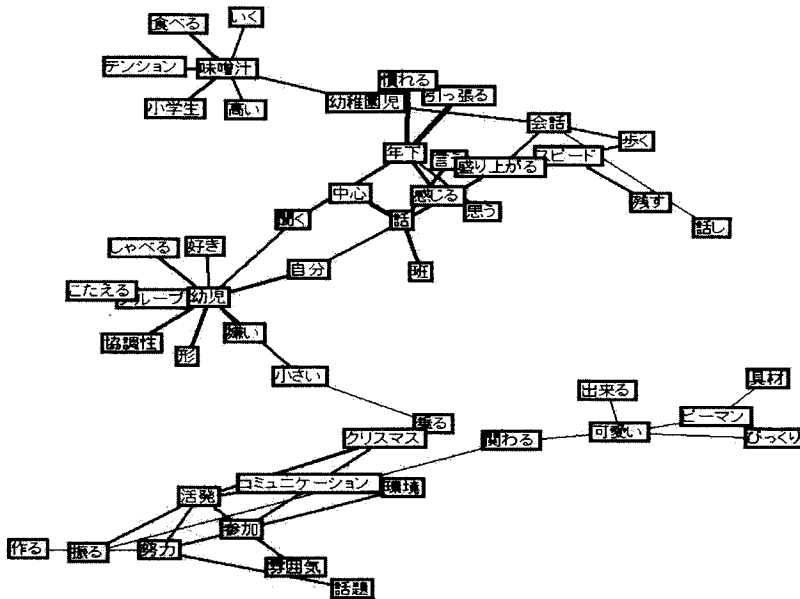


図5 中学生(②幼児について)のキーワードマッピング

となく、必要に応じて更新していく柔軟性を持ち続けることこそが肝要であるように思われる。

その一方で、周囲の受容的な関わりの中で、苦手なみそ汁を食べるといふ本人にとって極めて困難な課題を乗り越えた幼児の姿を目の当たりにしたケースも認められた。その班では、まず、中学生がみそ汁のおかわりをして、そのおいしさを少々大げさに訴え、その次に小学生、続いて幼児が同様の行為を示してみせたところ、みそ汁の嫌いな幼児が、少しではあるがみそ汁を食べたという経過があったようだ。その場にいる年長者が、年少者に対して高圧的にみそ汁を食べるよう迫るのではなく、年少者が自発的にみそ汁を食べることを期待して工夫を凝らしているといえよう。その工夫自体は目新しいものではないかもしれないが、中学生の行為が、小学生、みそ汁を食べることができる幼児へと伝わっていく様子が興味深い。みそ汁を食べるといふ極めてありふれた行為ではあるが、それができない当事者にとっては大きな課題となり得る。中学生や小学生は、自分たちが運営した活動において、周囲の工夫と支援を得て、幼児が困難を少し乗り越えたことをどのように受け止めたのであろうか。

<③ 小学生について>

中学生が小学生について述べた内容に基づくキーワードマッピング(図6)では、「中学生」「会話」「関する」というキーワードにリンクするワードが多かった。「中学生」の周囲に位置する語は、「進行」「説明」等の名詞、「盛り上げる」「ひっぱる」等の動詞であった。同様に「会話」に関しては、「みそ汁」「フォロー」等の名詞、「食べる」「入る」等の動詞が配置され、「関する」に関しては、「印象」「わがまま」等の名詞、「思う」「変わる」等の動詞が配置された。

インタビュー内容を確認すると、「中学生」に関しては、「中学生で好き嫌いがある子がいて、そこから食べ物の話。小学生が盛り上げてくれたんで、進行としても中学生がひっぱる形でも良かった。小学生が元気な子で助かりました」といった回答が確認された。同様に「会話」については、「小学生は、最初は会話に入れていなかったけど、途中から入ってくるようになった。どちらかというと、会話が中学生で、会話しているから、幼稚園が水筒倒しそうになったりとかをフォローするのが小学生」といった回答が、「関する」については、「小学生がわがままかなと思っていた。小学生に関しては、特に低学年

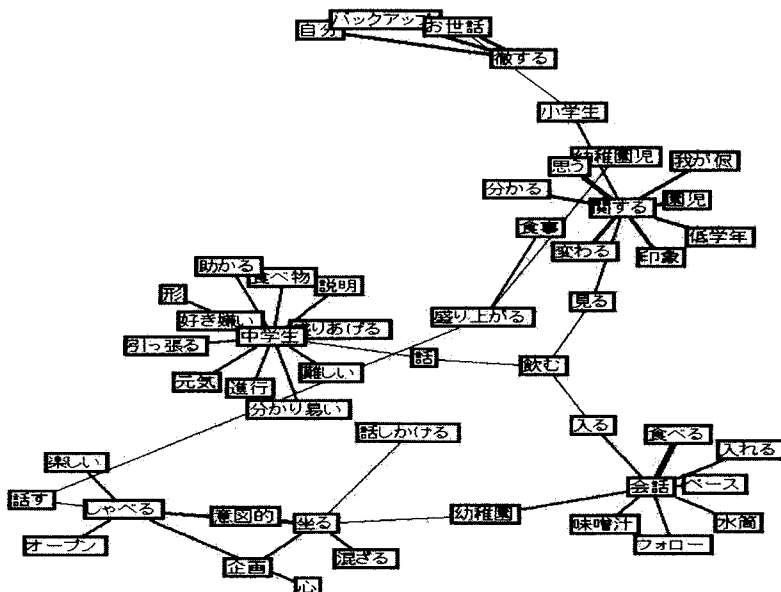


図6 中学生(③小学生について)のキーワードマッピング

に関してはよくわからなかったが、園児を呼ぶ前を見て“意外におこうさん”と思って印象が変わった」といった回答が抽出された。

上記では、本活動において、年長者でもあり、また年少者でもあるという小学生の複雑な立場が記述されている。例えば、活動開始当初はなかなか会話に入れなかった小学生が、活動の進行とともに、その場に適した振る舞いを探り当て、その役割を果たそうとする姿が紹介されている。しかし、中学生がその状況に無頓着であったというわけではなく、その場を盛り上げ、また、幼児の支援を担う小学生の姿を認め、感謝していたことも確かなようだ。そして、小学生に対する印象の変化に言及している点にも着目したい。本活動に至るまでに、幼児との交流の機会はあったが、小学生とはそうした機会は設けられなかった。つまり、小学生に対する自身の認識と実態との照合が可能となるほぼ初めての場であったといえよう。記述内容からも、小学生に対する認識がより肯定的に変容したと考えられ、その変容の程度は、幼児に対してよりも大きかったかもしれない。

総合考察

(1) 小学生の学習内容について

まず、幼児及び中学生に対する認識の変容という点から考察したい。概して、幼児に対しては能力的な過小評価の是正、中学生に対しては社交性に関するやや否定的な評価の是正が認められた。今回、それぞれの小学生によって改められた認識は、今後も折に触れ更新されていくものと思われるが、自身の認識を評価し、必要であれば改めるという行為は、今後の人間理解に資する経験であるように思われる。

次に、その場で求められている役割を推測し、適切に振る舞うという点について言及したい。本活動における小学生は、幼児に対しては年長者である一方で、中学生にとっては年少者であるという二面性を内包していたと解釈されたが、そのことに起因する戸惑いの中にありながらも、

小学生の多くはその場に適した振る舞いを見出し、実行するよう努めていた。その場に適した振る舞いについては、例えば、中学生の指示に従うことが求められる場合がある一方で、幼児を積極的に支援することが求められる場合もあるであろう。その場に適した振る舞いは、それぞれの小学生が所属するグループによっても、また刻々と変化する状況によっても大きく異なってくる。以上のように、小学生には何らかの負担が生じていたように思われたが、ほとんどの小学生は活動が楽しかったと評価しており、そうした認識の齟齬については、更なる考察が求められる。

(2) 中学生の学習内容について

中学生においても、幼児及び小学生に対する認識の変容が認められた。概して、幼児に対しても、また小学生に対しても、能力的な過小評価の是正があったように思われる。特に幼児に対しては、それまでの『幼児を招こう』等の交流から得られた知識に基づいて立てられた仮説を検証するというサイクルがあったようだ。そこに、単発的ではなく、継続的な交流実践が持つ意義を見出すこともできよう。

次に、活動を運営する立場としての振る舞いについて述べる。本活動において設けられた班では、幼児、小学生、中学生が数名ずつ配置されており、必然的に中学生が班活動のリーダーを担うこととなった。通常の学年クラス単位での授業では、活動を牽引する生徒は特定の数名であることが多いが、本活動では、ほぼ全ての中学生が各班の活動を滞りなく進める役割を同等に担っていた。それぞれの中学生が、多くの年少者を含む小集団での活動に際して、集団を牽引する立場であるということを実感しつつ、その時々状況を主観を交えつつも客観的に判断し、より望ましい行動を選択して実行することが求められるという、貴重な機会であったといえよう。

(3) 今後の課題

本研究の課題として、まず、インタビュー調査の対象とした児童生徒の人数の少なさが挙げられる。本研究は、本活動に参加した全児童生徒を対象に質問紙調査を実施した研究(尾島ら、印刷中)を補う研究として位置づけられることが望ましい。また、本研究で示したキーワードマッピングは、同一テキスト中の共起頻度から作成されていたが、収集されたデータには、同一の調査対象者による同じ言葉を繰り返しながらの回答もあり、そのケースも含めて作成されたキーワードマッピングである点には注意を要する。本研究で採用した分析は、インタビューを通して収集されたデータの解釈の基点を特定することができたという点においては有効であったといえるが、調査対象者の総意をどの程度明らかにすることができたのかについては課題が残った。今後は、そうした課題を認識した上での分析の実施や、そうした課題を克服するデータ整理方法の案出が求められるであろう。

次に、本研究では、小学生及び中学生の認識の変容と小集団内での振る舞いに着目して考察を進めたが、班員が協力してみそ汁を作り、弁当と一緒に食べるという本活動ならではの特性に着目して考察を深めることができなかつた点が挙げられる。例えば、「一緒に作って一緒に食べる」といった行為がもたらす学習について分析し、調理を含む食に関する活動のみが持ち得る意義を解明する研究が待たれる。

引用文献

- 遠藤宏美 2013 小中一貫カリキュラムの構想プロセスにおける異校種間文化の相違：小中一貫した「総合的な学習の時間」カリキュラムの検討を事例に 宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学, 28, 1-18.
- 福島大学附属幼稚園・大宮勇雄・白石昌子・原野明子 2011 子どもの心が見えてきた：学びの物語で保育は変わる ひとつなる書房
- 橋本正恵・綿引伴子 2013 中学校に幼児を招こう：幼児観察を通して企画を練り上げる問題解決型の学習 荒井紀子(編著) 新版生活主体を育む：探究する力をつける家庭科 ドメス出版 Pp.189-197.
- 日本発達心理学会(編) 2013 発達心理学事典 丸善出版
- お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター 2008 「接続期」をつくる：幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働 東洋館出版社
- 尾島恭子・綿引伴子・松田洋介・滝口圭子・橋本正恵・西多由貴江・中村正寛・中田泉 2013 大学・附属学校園における連携活動の検討：家庭科を中心とした実践事例から 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 5, 45-53.
- 尾島恭子・綿引伴子・滝口圭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江 印刷中 大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討(1)：みそ汁作り・お弁当交流会の事例から 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要 教育実践研究, 40, 印刷中